現代紀行文學全集

山岳篇（下）

現代紀行文學全集

道社

現代紀行文学全集
第七巻　山岳篇（下）

志賀直哉
佐藤春夫
川端康成　監修

昭和三十四年六月五日　印刷
昭和三十四年六月十日　発行

定価四八〇円

発行者東京都千代田区神田一ツ橋二ノ五　秋山修道
印刷者東京都千代田区神田美土代町十六　山根正男
発行所東京都千代田区神田一ツ橋二ノ五　株式会社修道社
電話(30)〇五〇二・〇五二九振替口座(東京)六一六九一
印刷・株式会社三秀舎　製本・山田製本印刷株式会社

目

次

徳本峠　窪田空穂……三
上高地遊記　吉田絃二郎……一四
神河内　松方三郎……二四
穂高　松方三郎……三一
穂高・徳沢・梓川　浦松佐美太郎……三五
安房山越え　滝井孝作……四一
笠ガ岳　ウェストン……四四
平の二夜　石川欣一……五一
高瀬入り　辻村伊助……六三
涸沢の岩小屋のある夜のこと　大島亮吉……八〇
薬師岳登山記　辻村太郎……八九
天狗原圏谷を観る　田中薫……八九
松尾坂の思い出　槇有恒……九六
松尾坂の不思議な幻影を思い返して　三田幸夫……一一七
奥穂高と乗鞍　板倉勝宣……一二三
山と雪の日記　板倉勝宣……一三五
冬山単独行　加藤文太郎……一三五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

槍ガ岳より日本海へ　田部重治……一三八
黒部峡谷完溯記　冠松次郎……一五三
越中剣岳　木暮理太郎……一八一
立山　深田久弥……一八五
十一月の白馬連嶺　藤木九三……一九四
日本アルプスの五仙境　木暮理太郎……二〇六
御岳山の両面　吉江喬松……二一一
木曾より五箇山へ　柳田国男……二一九
笠ガ岳から穴毛谷へ　小島烏水……二二六
木曾駒宝剣岳　川崎隆章……二二九
白峰山脈に入る記　小島烏水……二三五
仙水峠から栗沢山　串田孫一……二四五
積雪期の白根三山　桑原武夫……二六七
鳳凰山　足立源一郎……二七〇
山頂漫歩　関口泰……二七一
白峰山脈の南半　中村清太郎……二七五
美ガ原　尾崎喜八……二八一

山を越えて伊那へ　田山花袋……二九一
杖突峠の展望　細井吉造……二九五
妙高山　深田久弥……二九七
佐渡の高原ドンデン山　村井米子……三〇〇
大白川口　松方三郎……三〇六
雪の石徹白高原　森本次男……三一七
揖斐川の上流、門入を訪ねて　安芸恭平……三二六
伊吹山　河東碧梧桐……三三三
鈴鹿紀行　桑原武夫……三三七
近畿の山々　北尾鐐之助……三四一
半世紀前の登山話　宇野浩二……三四九
普甲峠　藤木九三……三五五
熊野那智山　若山牧水……三五八
大山　河東碧梧桐……三六九
三段峡と八幡高原　辻村太郎……三七六
石鎚山・瓶ガ森山　畦地梅太郎……三七八
彦山　小杉放庵……三八一

九重と祖母・傾……足立源一郎……三九二
湯山峠にて……早川孝太郎……三九四
薩南の山旅……深田久弥……三九六
屋久島……足立源一郎……四一八
発表誌一覧……四二一

地図

徳本峠一三　安房山四三　中部・アルプス七五　高瀬入り七九　松尾峠・立山一一七　日本アルプス主部一六九　黒部一八〇　白馬連峰二〇六　御岳二一八　南アルプス二七四　杖突峠二九六　佐渡三〇五　石徹白高原三二六　揖斐川上流三三二　近畿三四五　普甲峠三五八　熊野那智山三六九　中国・四国三七三　大山三七五　石鎚山・瓶ガ森山三八一　九州三八九　彦山三九一　九重・祖母・傾三九四　薩南の山四一七

山岳篇

（下）

徳本峠

窪田　空穂

夜が明けて来た。

けんけん、けんけんと、死の悸えから鳴いているような犬の声、夜陰を貫いて一晩中聞え通していたその声は何時か止んでしまっていた。顔の上に飛んだ虫は、――たたくと掌にも残らなく死んではしまうが、直ぐに後から飛んで来た虫はもう来なくなってしまった。その代りに、もうもうと、鈍い牛の声が聞えて来る。

しらしらと障子に明るさは漂っている。眼はそれを見ているが、寝不足の頭はぼんやりとしていた。

舅はあち向きに眠っていた。黒い鞄は枕もとに置いてあった。ぐっすりと眠っているらしいのを見ると、眠ろうとすれば何んな所にでも眠れるその体に、弱そうに見えながら私にはない強いものを持っていることを思わせられた。

顔を洗って来ると、昨夜銭湯へ案内した老婆が茶を運んで来た。

「何だか羽のある虫がいるね、蚊じゃ無いらしいが。」

「蚋とか言いますよ。明りをつけて障子を明けて置こうもんなら、それはたまりませんよ。」

土地の者ではないらしい調子でそれに困っているのだと訴えるように言った。それならば前に注意すればいいものをと思って、私は苦笑する外はなかった。

広蓋で朝飯を運んで来た。昨夜の少女は、盆を膝の上に置いて、ちょこなんと据わっていた。泣こうとしているような眼もとが、ともすると眠むそうに曇って来た。

僅かの茶代に上さんは、急に世辞笑いをした。

「その草鞋ではけんのんでございます。一足ずつお持ちなさんし。道中はもう見っとも無いも何もありませんよ、支度が第一でございすで。どれ私が付けて上げます。」

そういって上さんは、子供に付紐を結んでやるように、前から抱きつくようにして後ろへ手を廻して、草鞋を腰へ結び付けてくれた。

「道は？」と舅は聞いた。

「え、直ぐ其処からおまがりになりまして、真っ直ぐに、真っ直ぐにといらっしゃいまし、――左へ折れる道がありますので、曲らないように。」

夏の朝でなければ感じられない涼しい空気は、やさしい青い空から地にと満ちていて、快く私たちの顔にふれた。

山と山の底に、灯かげに濡れて静かに眠っているように見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

えた昨夜の島々のうつくしかった町は、けばけばしい駅に変って私たちの前につづいていた。

夏蚕の繭をかいている家、蚕糞を軒下にほした家、そうした家の軒下を通って、細い路は山と山との間に上って行った。

私たちは一いろの緑の中にはいり込んでしまった。前も後も、右も左も、上も下も、皆な緑であった。そしてその緑はかがやいて動いた。

水の中にいる小魚のようだ——と私は自身を思った。歩きながらも眼を漂わして見上げ、見まわしした。

私たちの歩いている所は、山と山とのつづいている谷底を流れ落ちて行く、その谷川の岸であった。

山は高くはないが、頂きを見るには仰向いて見なくてはならないような峻しさを持って居た。山の肌を蔽いつくしている樹立は、青と緑と、ところどころに濃緑を点じて、隈をつくり合った。その中からぬっと、高い岩があらわれた。

流れは谷川の姿をしていた。青い水は岩に触れて、絶えず白く砕けた。大きな岩に遮られた水は真っ白に散って、次ぎの瞬間には真っ青に、静かに淀んだ。騒しくはあるがその中に不思議な単調を持った瀬の響は、澄んだ、何処か遠くからの音のように聞えた。

日光は山の頂きの青い上にかがやいた。流れはただ谷の青さに煙っているばかりであった。

路は、山の腹につけてあった。流れを真っ直ぐに眼下にしていた。爪先上りのその路は、俄かの変化に眼を見張る私たちを夢のように導いた。さわやかさと、すずしさとにはそわそわとする私たちをうねりうねりさせながら導いて行った。

路の脇の小高い所に、白ペンキで塗った掲示が立っていた。研究の為めとしての許可を得たものでなければ高山植物は取ることを禁じるという意味が書いてあった。

「もうこんなものがあるんですね。」と私は呟いた。山深くはいって来たような気が急にされた。

私たちの前に、ぽっつりと一人見えて来た。

その人は背中に高く荷を背負って居た。こちらから見ると荷だけが眼について、その下にあらわれている脚は極めて短く見えた。ぽつり、ぽつりと、動くか動かないか分らないようにのろく歩いていた。その恰好は一と目見た時にはおかしく見えた。やがておかしさを失って来た。緑にかがやいている山と山とは、その人の後姿を、小さな醜い、ぐずぐずとうごめいている虫かなぞのように思わせて来たからである。

私たちは直ぐに追いついた。その人は振り返った。それは若い男で、日にやけた赤い顔に微笑を浮べて、

「今日は。」と挨拶した。

私たちも挨拶をかわした。

男は路を譲って後になった。明るい、子供のような表情をもったまるい眼は、何を思っているとも見えなかった。

「上高地まで行くのかい?」

「いいえ、岩魚どめの茶屋まで。」

暫く一しょに歩いていたが、振り返って見た時には、緑が

谷にかがやいているばかり、男の姿は見えなかった。
「あの連中は米一俵を背負うってことになってるんです。それに小付けがあるで、まあ十五貫以上ですな。可哀そうなものです。」
舅は歩きながらこう話した。
「山の色がすっかり違って来ましたね。」
私はそう言って、今更のように山を見上げた。そこに濃い緑が消えて、一様にうす青さになっていた。それは平地の初夏にだけ見るような柔かいものであった。日光も何時かはげしい色を失って、明るく、染み込むようになって、谷から谷を照らし、しらじらと乾いて来た石ころ路を照していた。
岩から岩へ架けた橋を幾つか渡った。流れは足の下に低く遠くなった。爪先上りの路は、次第に峻しくなって来た。
体は汗ばんで来た。さらさらと岩を伝って走り落ちる清水を見る度びに私は立ち寄った。舅はアルミニュームの水呑みを出して貸した。
「杖を切って上げよう。」
舅はそう言って立ち止った。鞄から小さな鋸を出して、手頃な枝を切った。そして小刀で小枝を払った。
「山へ来るには山刀が重宝なものだが。——」と言って、その杖を呉れた。
歩みはぽつりぽつりと重くゆるくなった。
「実にいい柳がありますね。——何うですあれは！」
私は立ちどまって流れのあちらの岸に立っている一本の柳を見下して指ざしをした。
「そう！」と舅も立ちどまった。
水に根は洗われながら、柳の可なりの大木は立ちつづいて居た。それは楊柳であった。幹にも枝にも聊のうねりもなく伸びやかに育っていた。まばらに付いた葉は、濃緑の、大きな、丁度夾竹桃の葉を見るようであった。素朴な、そしてその中にしなやかさを隠した木は、さわやかにも気高くあった。
「柳があんなに立派なものだってことを初めて覚えましたよ。——なぜ彼れを画かきは書かないでしょうね。」
「そうですね、柳の画は皆なつまらない。」
舅は頷いて、そう言った。近年舅は書画の蒐集に凝っていた。
「これは桂ですよ、知ってますか？」
「いいえ。」
路と流れとの間の崖に立っている大木の側に私たちはまた立ちどまった。
幹も枝も直線をした木であった。小さな円い濃緑の葉が簇って付いて、不思議なまでにささやかな感じを持っていた。
「裁物板くらいより外使えない木だから、こうした大木が残ってるんですね。」
「気持のいい木ですね。」
「かすかな、いいにおいのする木ですよ。殊に曇った日になんかは、遠くからほんのりと匂ってそれはたまらない位ですよ。」

柳と桂は次第に多くなって来た。
「これは橡ですか。」
「ええ、橡です。」
それは大木であった。青い大きな葉は柔かに光っていた。
「この木は椀に挽く木ですね。以前は木地屋は——知ってますか、旅から旅を渡ってあるく木挽ですが——鑑札さへ持ってりゃ、何所の山の橡の木でも伐っていいことになっていたものです。」
「へえ！　妙なきまりがあったものですね。」
路に沿った崖の上には、うす紫の、紫陽花によく似た花が咲きつづいていた。初めは紫陽花かと思ったが、紫陽花の種類の、がくの方に似ていると思った。
「がくですか、此れは？」
「山卯つ木ってのですね。卯つ木の種類で、丈夫な釘になりますよ。」
路ばたの青草の中に、おりおり見なれない形をした草花が咲いていた。心付くと、路の両側の踏みかためられてかたくなった土に、丁度細く縁を付けたようになって車前草が生えつづいていた。堅い、そして埃のかかる土の上でなければ生えまいとしているその草が不思議なものに思われた。
「苺ですね！」
青草の中に真っ紅に、木苺が熟していた。私はかがんで摘んで口へ入れた。

深く見下した流れは次第に浅くなって来た。それと共に両岸の山は狭く閉じて来て、岩山となって来た。削ったような岩の肌は赤く黒く見えて、水のしぶきに濡れていた。
つと流れの中に一つの大きな岩の立っているのが見えて来た。私たちはその脇へ来た時には立ち止ってしまった。
流れを瀬切って峙った岩は、岸に立ってやや上目をして見る程の高さを持っていた。その上には石楠の木が簇って、枝をくねらせていた。水は巌の脇から走り出して白く滝になって落ちた。
両方から迫っている岩山は、頭の上でくずれようとするような形をしていた。そこにも石楠があった。その岩山は流れと一しょに、少し上手でうねってしまっているが、其所には橋が架っていて、橋だけがしろしろと見えた。
振り返ると、下流は直ぐ隠れて、真っ直ぐに眼の向う所には、峻しく高い山が聳えていた。その上の線はやわらかく、青く煙って、裾の方には霧をまつわらせていた。
青葉のにおいが深くあたりにおどんでいて、日光が、遠く、しらじらと仰がれた。
舅は立ち止って、ほれぼれと其の岩を眺めた。
「この侭画ですね。こんな所こそ半日位い眺めていても飽きませんね。増田でも連れて来て書かせたら楽しみでしょうね。」
増田というのは舅が其の将来に眼をつけている青年の日本画家である。私は見とれている舅の顔から又其の岩へ眼をや

った。
それは珍しい景色であった。岩と水とは如何にも舅のいうように、南画でなければ見られないような形をしていた。珍しいからいい、刺戟的だからいい――という多くの鑑賞家の心持を、私は舅の心に見ずにはいられなかった。
「画にすると、何枚にでも書けますね。」
私はそう言った。南画家はこれを一幅にまとめるであろう。そして奇妙な形の中に、自然の持つ生気を、ここにも不思議に漂っている此の生気を消してしまうだろう。それが厭だと思うと、私は言わずにはいられなかった。
「ええ、へぼな画かきは、一方から見ただけで書いてしまうが、本当の景色は何方から見てもいいもんですね。」
「成る程、そうですね。」
ちらりと、川上の方の橋の上を白い物が動いた。登山者だろうと思った。と私たちの前へ四五人の西洋人が現れて来た。何れも若い男女だった。男は白の詰襟、女も簡単な白の服を着て、裾を取りながら、すたすたと、やや下りになった路を急ぎながら近づいて来た。
「今日は。」
「今日は。」
男も女も、私たちの後ろを通りながら、こう言って挨拶をした。私たちは其の日本語に驚かされ気味になって返事が出来ずに居た。
一行は行き過ぎてしまった。その後姿を見送っていた舅と私とは、顔を見合せて笑った。
迫って来た山は、また展けて来た。
「景色がよくなると思ったら、あすこきりでしたね。」
舅はつまらなさそうに呟いた。
「川があるからいいが、それでないとたまらない路ですね。」
同じような路は、どこまでも、どこまでも、私たちの歩くに随って続いて行くように見えた。気が倦んで来ると足は重くなって来た。僅かばかりの背中の包も重いように感じられて来た。
「弁当食べましょうかね。」
「ああ。」
私たちは、沢から水の落ちて来る所を見つけると、其の側へすわって、宿から持たせてよこした握飯を食べた。
ふっと山の蔭から人足が現れた。それはずっと前に、あとにして来た若い人足と、今一人の年寄った人足であった。二人はにこやかに声を懸けて行き過ぎた。やはり、ぽつりぽつりと杖にすがって歩く人のようなのろい歩調をしていた。
瀬の音が荒くなって来た。眼の下に見た溪流はいつか足の下になった。川幅も狭くなって居た。
私たちの歩いている路も次第に急になって来た。
一しきり急な路を登ると、私たちの眼の前につと一軒の家が現れた。そこはやや平らになっていて、そして其の上へ老木が濃い影を落していた。木蔭に当って小さな家がただ一軒、漆で塗ったように真黒に煤けて立って居た。岩魚どめの茶屋、

と聞いたのが此れだなと知った。
「おお。」と私は声を立てて、自然に駈け出すように其の家へ向った。家の恰好をしたものを見ると、私は珍しい、懐かしいもののような気がしたのであった。
囲炉裡ばたに、上さんと見える女がいて、ゆっくりした調子で立って来て迎えた。四十を越した位の女で、髪は櫛巻にして、銹漿を黒々とつけて居た。顔の色は日にやけていたが、山の中の人に見る白い色をしているので、極り悪さから紅らめた色のように生き生きしていた。そして丸い眼はその顔いろに似合って見える程に、くりくりと子供らしい明るい表情をしていた。一と目に親しみを感じさせられる顔の一つであった。
囲炉裡のこちらの側には、さっきの二人の人足と、そして郵便物を持った若い男が郵便の上封を読んだり、葉書の文句を読んだりしていた。あかあかと燃えている火と、黙って、ゆっくり落ちついた顔をしている人たちを見ると、丁度周囲の山や木のように、そこには「時」というものが歩みをとどめてしまっているようにも見えた。
上さんは茶を持って来た。縁に腰をかけた舅は、こちらの間の棚の上を見廻していた。そこには罐詰と僅かの駄菓子とが並べてあった。
「その菓子を」と舅は言った。そして、「岩魚があるかね?」と聞いた。
「ええ。」と上さんは笑顔を作った。
「それじゃ岩魚で、飯を。」
「焼きましずか、煮ましずか?」
「煮てもらうかね。」
薄荷を入れた麦の菓子が、不思議にうまい。私は皿に盛って出されたのをあらまし食べてしまった。山から引いてある筧の水は、木蔭になった所で、樋の口から綺麗に、そして涼しい音を立てながら箱の中へ落ちている。それが眼の前で踊っているように見えた。
山の中から下りて来た一人の客は、私たちの前を挨拶して通った。どこへ腰をかけようかとしているらしかったが、とうとう私の側へ腰を下した。
席を少し譲って、そしてそこに脱ぎ棄ててあった糸だてをこちらに引き寄せてやると、旅人は嬉しそうに礼を言った。
登山者だな、と私は思った。背広に半ズボンをして、脚絆に足を固めていたが、其の半ズボンも脚絆も、長途の旅をした人のように破れてしまっていた。それよりも、手に提げて来てそこに立て懸けた杖は、杖の先へ蕨口のような形をした、やや大きい、そして先の二つに割けた金物を付けたものであった。岩に引っかけて山を登ることも出来れば、植物の根を掘ろうとしても便利なもののように見えた。いい物だと思った。
「失礼ですが、東京からですか?」
旅人はそう言って聞いた。顔は日にやけて赤くてらてらとしていて、鼻の頭の皮がむけて居たが、その明るい、感じ易

そうな眼にも、軽く、滑かな言葉の調子にも、都会の人からでなくては受けられない快さを持っていた。
「ええ。」と私は答えて微笑した。
「東京は何んな様子でしょう。すっかり様子が分らなくなっちまいましてな。」
「さあ。」と私は返事に当惑して、強いて笑った。
相手も、無理な質問だと心付いたように笑った。
「支那問題は何うなりましたろう?」
「ええ。此れは間もなく解決するだろうって話でしたよ。政府も、浪人会も、どちらでもいいから早く形を付けさせてしまわなくてはならないって点で一致しているということを聞きましたがね……。」
旅人は頷いて、
「私はもう三十日間山の中にばかりいまして、昨夜上高地へ下りて久し振りで人の顔を見たんですから。」
「三十日」と私は眼を見張った。「大変ですね。」
「今年は加賀の白山から始めて、九千尺以上の山を十六渡って歩きました。その間人の顔を見たことは、たった一度きりでした。一度は或る小屋で、新聞の半ぺらを拾いましてね、皆でうばい合って覗き込んで読みました。其の次には、或る小屋から煙が揚るので、人が居る! ってもので、皆でわあっ! と声を揚げて駈け込みましたよ。人足の顔の日に焼けて、段々変って来るのを見ておかしがって笑うんですが、自分の顔は分らないんですものね。」
「大変な御旅行ですね。」
私は驚いてその顔を見詰めた。……何ういう人だろう。学者とも、官吏とも、会社員とも見えない此の人は、一体何ういう人だろう。
「ええ、しまいには都恋しくなって来ましてね、早く東京へ帰って、先ず天ぷらを食べて、帝劇へ行ってと、他愛の無いことばかり考えましてな。そういうと、昨日は上高地で河原へ天幕を張りましたが、久し振りで茄子漬を食べて、おいしゅうございましたよ。」
飯の菜にと、舅の家から持って来た漬物を私たちは食べていた。
「失礼ですが。」と私は其れを出した。
「有り難う、頂きましょう。」と旅人は手を出した。
「此れが上高地でしてもらった写生です。」
旅人は鞄の中から五六枚の絵葉書を出して見せた。それは天幕や、此の旅人やを写生したものであった。西洋画家の書いたもので、そしてIという名が署してあった。
「I君の絵ですか。」
「御存知ですか、あの髯達磨?」
「ええ、ちょっと。」
「そうですか。」と旅人は親しそうな眼をした。
旅人と私とは一二共通な知合いを持っていることを知った。が、旅人も自身の名は言わない。私も言おうとはしなかった。
別れしなに旅人は、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com